

槻蔭

志村黙榮

境川時代 昭和九年より昭和十四年

昭和九年初秋初めて赴任した境川小学校

その秋深き頃尋常三年生を引率して

米倉山に遠足、生れて初て俳句

らしきものを作る

子供等を狩り出す声や秋の山

読み〓こどもらを かりだすこえや あきのやま

季語〓秋の山(秋)

米倉山(こめくらやま)は、学校から歩いて三十分くらい、境川村地内の標高三百五十メートルばかりの山。現在は日本最大級のメガ・ソーラー(太陽光発電所)が稼働している。

当時は、普通の里山であったであろうから、当然普段からこの山の中を遊び場に行っている子供もいる。そんな山の餓鬼どもを、遠足弁当持ちのハイテンション状態で解き放ったのであるから収容は木の上を含む三次元の搜索が必要で、容易ではない。二十一歳の榮助の若々しい声が聞こえてくるようである。

昭和二年の徴兵令改正により、師範学校卒業生は短期現役兵制度による五カ月間の兵役後、下士官伍長で退役することになっていた。昭和九年四月榮助は二十歳で山梨師範学校本科二年を卒業、直ちに短期現役兵制度により甲府四九聯隊で五カ月間の兵役に就いた。榮助は五尺五寸で一六貫、当時としては巨人であったので、体格の良い兵隊が選抜される十一年式機関銃の銃手の訓練を受け、予定通り陸軍伍長で退役、昭和九年九月、二十一歳で境川尋常小学校に赴任した。

学校ぼつと出の若い教師が田舎の小学校に赴任と云う、田山花袋の『田舎教師』の清三そのままであった。それかあらぬか、『田舎教師』は榮助の愛読書の一つであった。

とはいえ、境川はただの山村ではなかった。家と小作を守る為に東京から帰った飯田蛇笏が境川山廬を結んでいたのである。昭和九年当時、蛇笏は第一句集である『山廬集』を出したばかり、油の乗り切った五十歳であった。



山梨師範学校の制服制帽
姿の深澤榮助。二十歳位か。

眼鏡は乱視用である。私の知る父榮助は老眼鏡以外の眼鏡はかけなかった。

この眼鏡は後に富士登山の際、落として失くしてしまったと聞いた事がある。私も弱いが乱視であるので榮助に似たのかもしれない。

山廬寒夜句三昧には先輩の・

先生達と十一年頃より参加した

《山廬寒夜句三昧とは、小黑坂の山廬の土蔵の二階の座敷で冬に三夜連続で催された。各自に硯が配られ、短冊に墨書で投句、蛇笏自らが選を行った。参加は無料で自由、参加者には食事が振舞われ、句会は深更に及ぶ蛇笏との真剣勝負の場であった。

しかし、当時の境川村はとんでもない田舎、参加できるのは近郷近在の者に限られ、いきおい、境川尋常小学校の教員の参加は或る意味必然でもあって、かなりの人数が参加したと言う（飯田龍太著「龍太語る」より）。

火の番に塔影織く曳きにけり

読みⅡひのばんに　とうえいほそく　ひきにけり

季語Ⅱ火の番（冬）

火の番は村人が、冬季に持ち回りで番小屋に泊りこんでやったものである。旦那衆が持ち回りで火の用心を訴えながら回る落語の『二番煎じ』に同じである。

塔影とは寒く凍てついた陰。寒そうな風景である。

風邪の子の瞳うるめるマスク哉

読みⅡかぜのこの　ひとみうるめる　ますくかな

季語Ⅱ風邪（冬）、マスク（冬）Ⅱ季重ね

昭和十年頃の境川で風邪をひいた子供がマスクをしていた、というのはい寸驚きである。比較的暮し向きの良い家の女の子か。風邪、マスクと季語が重なっているが、マスクが主である。マスクに持つていくのに、風邪の子の、と単純に詠んでしまっている季重ねであり、あまり望ましくは無

いと思う。

容色のまだおとろえぬマスク哉

読みⅡようしよくの　まだおとろえぬ　ますくかな

季語Ⅱマスク（冬）

この対象は大人の女性であろう。まだおとろえぬと言っているのが若い娘ではない。学校の同僚の女教師か？。

二十三、四の若者がこんな句を披露したら蛇笏先生にも受けたであろう。「深澤君、ほりゃあ、誰のこんですか」位の御下問はあったかもしれない。

どことなく、

『労咳の類美しや冬帽子／餓鬼・龍之介』

を思い起こさせる

巻頭選ばれてびつくりした句

《蛇笏主催の俳句雑誌『雲母』の巻頭句に選ばれたという事であろう。これはたいへんな名譽である。》

賤機や寒禽翔ける山の径

読みⅡしずはたや　さむどりかける　やまのみち

季語Ⅱ寒（禽）Ⅱ（冬）

賤機は普通名詞では宗教的な特殊な布（倭文Ⅱしずり）を織る機（織機）のことである。そんなものが境川にあったとは思えない事、賤機を強い切

れ字の「や」で受け、背景の場を作っている事からも、この句はおそらく静岡の東部、賤機山に遊んでのことであろう。禽は鳥類の総称。この場合小鳥であろう。という解釈は前書が何もないことから一寸無理か。

境川時代の拾遺

桐咲いて夏来る空の気配かな

読み||きりさいて なつくるそらの けはいかな

季語||夏来る(夏)

黙榮には季語を複数含む句が多い。師の蛇笏にもそういう句が多いとされているので研究の結果、真似しているのかもしれない。

季語を複数含む句は主題が散漫になりやすい。典型には季語が競合してしまい、主題が別れてしまう季重ねという俳句の禁忌がある。

季重ねなんて気にしなくて良い、という流儀もあるが、晩年の榮助||元黙榮は、季語は一つが俳句の基本であると語っていた。若き黙榮がどう考えていたかは判らないが、蛇笏主宰の句会で二十代の若造が勝手な作句をする訳にもいかなかったであろう。

この句は、夏来る、が主題||季語であると思われるが、桐咲いて||桐咲く、も強力な夏の季節の言葉である。ただ、桐の花、は季語として認められているが、桐咲く、は季語では無い。桐の花は、爽やかな夏を演出しているが、この句では脇役である。と断言するが、実は迷いもある。

梅雨上る雲のこみだれ早苗植う

読み||つゆあがる くものこみだれ さなえうう

季語||早苗(夏)

この句も上五、下五に季節と言って良い言葉を並べ、さらに中七にも雲のこみだれ、も季語と言って良い位強い言葉を置いて、季語が三つ並んでいる感がある上、全て主語+述語のセットになっている。

何を詠んだのかちよつと解釈に迷うが、素直に田植えの風景とみたい。そう思えば、梅雨の名残の怪しげな雲の下での田植えの風景が浮かんでくる。とはいうものの、季重ねの悪さが出ていると批判もできる句だと思ふ。

境川での作とすると、全国に散在し、山梨県にもある機織りの神様、倭文神社と関係していると考えられる。倭文神社の周辺には間違いない機織り集団があったそうなので、境川に倭文神社があれば、この謎の句は、いにしえの様子を思つての句として簡単に解決する。

そんなに難しく考えなくても単にどこかから機織りの音が聞こえていて、小鳥が遊んでいるだけじゃないの、という解釈もできる。機織りの音は當時は珍しくはなかったであろうから、ま、これが正解かもしれない。

日の御子の避寒におわす日和かな

読み||ひのみこの ひかんにおわす ひよりかな

季語||避寒(冬)

日の御子とは天照大神の御子、即ち天皇陛下ないし皇太子殿下ということになるが、ここでは太陽の恩恵というような意味である。

日和かなと結んでいるので、よく晴れて風も無い暖かな、日の御子から賜ったような、冬の日そのものが主題である。

禍事の去りたる焚火赤々と

読み||わざわいの さりたるたきび あかあかと

季語||焚火(冬)

どんな禍事か分からないが、村人が大勢出てひと働きしなければならぬ事が起きたようである。幸い、事は片が付き、興奮冷めやらぬ村人が焚火を囲んで声高に話している。そんな光景である。山村の百姓は人が集まると、季節を問わず兎に角焚火をする。

更に悪口を言うと、上五と下五を入れ替えても句の体裁はあまり変わらない煙管句である。煙管句は黙榮には珍しく、『槻蔭』には殆ど無い。

早苗植う雲のこみだれ梅雨上る

梅雨上るは双六の上ると同じで、梅雨が終わる〓梅雨明けのこと。梅雨が明けてからする田植えというのは日本の季節の常識よりはるかに遅い。境川も藤井田圃同様に麦との二毛作田であるので麦刈り後の田植えとなるのである。麦との二毛作の無くなった今、田植えはどこにおいてもずつと早くなっている。

十一年教え子忽然と逝く二句

雲の峯笹とむらいの行きにけり

読み〓くものみね ささとむらいの いきにけり

季語〓雲の峰(夏)

笹とむらい、というのはありそうな言葉であるが、何の出典でどういう意味なのか分らない。笹には旅関連で使った時、飯のというような意味があるので、永訣を旅と見立て、大人のような本式では無い淋しい略式の葬式と云うような意味かもしれない。

小さな棺を守る淋しい葬列が夏の雲が沸く山道を行く光景である。

法名の童子に暑き夕陽光

読み〓ほうみよの どうじにあつき ゆうひこう

季語〓暑き(夏)

子供の仏様の名前には、最後に童子、童女が付く。確かに童子と付く法名を見るのはつらい、新米教師にとってそれが教え子となるとなお悲しい。

黙榮は、葬送の句をこの後でも四回、第一句を非常に高い調子、第二句を静かな調子の二句ペアで詠んでいる。

『雲の峯笹とむらいの行きにけり』

『法名の童子に暑き夕陽光』

下宿の隣の馬死

梅雨の闇灯して農馬病みにけり

読み〓つゆのやみ ともしてのうば やみにけり

季語〓梅雨(夏)

教え子に続いて、農馬の死である。日本の農家では馬は家族の一員で、馬小屋も母屋の中にあるのが普通であった。それでも夜は特別に明かりを点けないと真つ暗であった。下宿の隣家とは言え、榮助が馬の死にまでつきあう義理はないが、物見高く見物にいったものか。

石和四日市場に須田文誉君を訪れて帰り

渡し舟月供の野菜載せてあり

(俳句三代集入選句 明治・大正・昭和)

読み〓わたしぶね げつぐのやさい のせてあり

季語〓月供 または 月 (秋)

石和から境川への帰り道での渡し舟で渡る川といえは笛吹川である。当

時渡し舟があったのだと思われる。

お盆の供持 盆供は季語であるが、月供は歳時記には無く、大きな国語辞典にも月供という熟語は無い。月見と供物を組み合わせた黙栄の造語と思われるが、仲秋の名月への供え物を指す事は明確で、俳句三代集の選者もそう認めたのであろう。もしかすると、何かの古典にある言葉なのかもしれない。うっかりそういう質問をすると「ほんなこんも知らんだか」と罵倒されるので、調べもせずうかつには訊けない。この他にも月供を季語として使った句がある。

須田文警君とは師範学校の同級生。須田先生とはこの後もずっと親交を続けた。我が家にもよく遊びに来て、昭和五十八年の祖父好平の葬式にも参列してくれた。吞兵衛同志、気があったのであろう。

石和日蓮上人御硯の井戸

《御硯の井は石和の鶺鴒山遠妙寺にある日蓮上人が杖錫で穿った井戸と伝えられる。鶺鴒山遠妙寺は謡曲『鶺鴒』の舞台とされる名刹である。》

行雲や御硯の井に秋惜しむ

読み Ⅱ ころうんや みすずりのいに あきおしむ

季語 Ⅱ 秋惜しむ (秋)

行雲は流れる雲。行雲や、と強く切って雲が流れる空の風景を置き、その下でゆく秋を御硯の井に思っている。秋惜しむと連体形で終わっているが、俳句の公式通り、秋惜しむ、と連用形で終わった方が良いと思うのだが、黙栄の感覚では惜しむ私、なのであろう。

一宮へ遠足国分寺跡

《一宮国分寺は、聖武天皇により、天平年間に全国に建てられた国分寺の一つで現在もその径始と礎石などが残されている。場所は中央高速の釈迦堂PAのそば、境川からは六、七キロもあるうか、往復を考えると小学生の遠足としてはそれなりの距離である。一宮の現在は、自称日本一の桃の大生産地である。》

梅枝垂り礎石の柱穴に水腐つる

読み Ⅱ うめしだり そせきのあなに みずふつる

季語 Ⅱ 梅 (春)

国分寺跡の早春の風景。柱の跡に溜まった澱んだ水を腐る(ふつる)と詠んだところが難しい言葉が好きな黙栄らしい。

小黒坂所見

ずくを追う童に梅雨幽き大樹かげ

読み Ⅱ ずくをおう こにつゆくらき たいじゅかげ

季語 Ⅱ 梅雨 (夏)

小黒坂(こぐろざか)は小学校や役場がある境川村の中心地でかなり大きな集落である。といっても勿論都会ではない。傾斜地で坂道と石垣が多い場所である。梅雨時なら昼なお暗い大樹が茂り、餓鬼どもはみみずくを追うのである。

蛇笏山廬も小黒坂(こぐろざか)にある。

谷わたる風のはるけき午睡かな

読み〓たにわたる かぜのはるけき ごすいかな

季語〓午睡(夏)

『風のはるけき』が利いている。直接にびゅんびゅん当たる風ではなく、ふと忘れた頃に、谷をわたってふわっと吹いてくる風。気持よさそうな昼寝の風景である。

別れK子よ

《このK子なる女性について詳しく聞いた事は無い。何でも当時としては珍しい陸上競技の選手で運動神経の良い女性であったそうである。どこどなたで、どういう恋で、何故別れる事になったのか、今となっては十年の時の彼方、知る由もない。》

おぼる夜や手を置く肩のふくよかに

読み〓おぼるやや てをおくかたの ふくよかに

季語〓おぼる夜(春)

春雨の中凝然と佇つ娘なり

読み〓はるさめの なかじつとたつ むすめなり

季語〓春雨(春)

凝然と、をここでは春雨の柔らかさと、下に続く佇つ(ただづむ)に合わせて「じつと」と読んだが、ぎょうぜんと、と読んでも良いであろう。この句だけだと榮助に分がある恋の終わり〓別れみたいに見える。

親の成就しなかった恋の話というのは子としてはかなり複雑な気分になるものである。

昭和十四年立春三枝市治郎様方 下宿先

《下宿の主人の姓、三枝(さえぐさ)は甲州に特有な姓の一つで、三枝さんに会ったら、甲州に縁が無いか聞いてみて損はない。この三枝市治郎氏は当時の榮助からみると老人と言って良い年頃で、その奥方共々ちよいとわけありの夫婦だったようである。》

湯殿窓寒果つ月のまどかなる

読み〓ゆどのまど かんはつつきの まどかなる

季語〓寒果つ(春)

寒果つ、という成句での季語は無いが、寒が果てたので冬は終りで、立春である。立春の満月を風呂から眺める、風流である。

昭和十四年四月六日境川小学校を去り中巨摩郡野之瀬小学校へ

春雨のバスにゆがめる旧任地

読み〓はるさめの ばすにゆがめる きゅうにんち

季語〓春雨(春)

野之瀬は甲府盆地西側、赤石山脈の山の斜面にかかった、甲州で人が住める土地の西の端にある村で、榮助の生母、茂よじの生まれた辺りに近い。境川から野之瀬に直接行くバスがあったとは思えないので、甲府を経由して行ったのであろう。甲府からなら左後方に雨の日でも境川の象徴、坊が峰が見えたと思われる。

爾後句友なきまま終戦まで句作を絶つ。

誠に残念ながら五カ年の空白あり。

その間一句記憶にとどむ

《野之瀬から境川山楯に通うわけにもいかなかったようである。》

冴えかえる茶房ひそけく暖爐なる

読み|| さえかえる さぼうひそけく だんろなる

季語|| 冴えかえる (春)

冴え、は寒さで、冴えかえるとは、春に寒さがぶり返したという意味で、春の季語である。寒さがぶり返した早春、茶店の暖爐|| 囲炉裏に火がチロチロと燃えている。

拾遺

《前の句は昭和十四年の作であるが、ここから四句は、拾遺として昭和十一年ないし、境川での作を置いてある。年代順に並べ直す事も考えたが黙榮の意あるところかもしれないのでそのままにした。》

昭和十一年中巨摩郡神村に病友A先生を訪う

《中巨摩郡神村は釜無川右岸、甲府盆地を囲む山の麓の村。境川村からはかなりの距離があり、榮助の生家のある落合村には比較的近い。》

雲影の山畑をゆく暮春かな

読み|| うんえいの やまはたをいく ぼしゅんかな

季語|| 暮春 (春)

吹く風が気持ちの良い晴れた日、ちょっと小高い所に立って目の下の風景を眺めると、雲の影がその風景の上を移動して行くのが見える事がある。麗らかな春の長閑な風景である。

笹鳴ける藪のこぼれ日君ぞ棲む

読み|| ささなける やぶのこぼれび きみぞすむ

季語|| 笹鳴ける (冬)

笹鳴き、は冬の鶯のチチツと鳴く声。まだホーホキョと鳴けないのだとされている。前書きが無いと、恋の詩のようにも見える。

小鳥の研究者の中西悟堂によると甲州の鶯は歌が上手だそうであるが、この鶯はまだ初心者の方である。

宿^{ヨクナラヌ}の友と昼餉や春炬燵

読み|| よくならぬ ともとひるげや はるごたつ

季語|| 春炬燵 (春)

『宿^{ヨクナラヌ}の』をよくならぬ、と読んだのは黙榮の発案か、誰かの入れ知恵か、とにかく凄く読み方である。その友、A先生が幾つ位のどんな人だったのか、想像するしかないが、何の話をしているのであろうか。

坊ヶ峰にて

《標高三百九十五メートル、笛吹川の段丘に突き出した地形の坊ヶ峰は甲府盆地から境川を認識するランドマークである。坊ヶ峰に立つと、榮助の故郷である落合村は、釜無川と笛吹川の合流点を越えてほぼ真西にあたる。距離は直線で二十キロ位か。》

故郷は指頭遙かに麦の秋

読み〓ふるさととは しようはるかに むぎのあき

季語〓麦の秋(夏)

境川を含んで甲府盆地の南側の山沿いは現在は大果樹地帯で、麦畑は無いが、当時は水田も二毛作、水田にならない畑も一面麦を作ったものと思われる。大麦は米に混ぜて米の節約(米かべえ〓米庇い)。小麦は粉にしておほうとう、いずれにしても米の代用である。

昭和十年代の句はここで終わっている。

俳句の並びは、昭和十一年の境川の回想からいきなり昭和二十年にとび、次の有明海での句では昭和二十年の晩夏、二人の子持ちになっただけで、この間の、昭和十五年に深澤榮助は志村好平養女ゆりと結婚、志村榮助になった。



そして、

長男泰元が昭和十七年、次男謙讓が昭和十九年に生まれている。





昭和十九年秋頃の撮影と思われる。

榮助（二十九歳）

ゆり（二十八歳）が抱いているのは長男泰元（二歳）

はつ（五十二歳）が抱いているのが次男謙讓（一歳）

昭和十年代 終り